

# 雑 感

山 本 茂 久

私が東京歯科大学を卒業した1970年(昭和45年)ころは、歯科大学・歯学部では現在と同様、歯科保存学・口腔外科学・補綴学等の臨床科目が隆盛を極めていた。そのような状況の中、臨床には目もくれず、日常歯科診療の基礎となる論拠を求め、今も昔もマイナーである基礎歯科医学を目指し、私は解剖学教室を選択することにした。その当時の解剖学教室には12名が在籍し、各人がテーマを持ち、昼夜の分け隔てなく盛んに研究を行っていた。入室して初めて分かったことであるが、先輩の先生に「基礎の講座にこのように多数の人が在籍しているのはこの教室だけであり、他の大学、他の基礎講座にはないことだ」と教えられた。大学院時代に指導されたことは、何事に対してもひたむきにかつ積極的に取り組むことであり、それを実践した結果、学位論文を完成するに至った。長いようで短かった大学院時代も無事終わり、その後研究活動を継続し、大学院時代に学んだことを数十年忠実に守ってきた。

エナメル質の組織構造を詳細に研究したジョン・ハンター(ハンター・シュレーゲル条の発見者)は、彼の門下生で牛痘法を開発したエドワード・ジェンナーに「But why think? Why not try the experiments?」—考えるより、まず実験を試みよ—と言ったという。大学院時代に学んだこととハンターの言葉を肝に銘じ、研究をするにあたって重要かつ最も必要なことは、アイデアもさることながら、積極的に実験をすることであることを私は若い研究者に対して言い続けてきた。机上で文献等を読み漁るデスクワークでは成果はおろか、結果すらでないのは自明の理である。テーマを実践、実験してこそその結果であり、データがでてから思い悩み、考察することで、しかるべき道が示され、今後の実験の方向性が明瞭となる。しかしながら、今も昔も若い研究者の中には、何かの事情(人によって異なるとは思いますが)やデータ不足を口実に、1年も2年も論文を書かない人がいる。一般社会において、会社員が仕事に関する業務報告を長期にわたりしないでいたなら、当然何がしかの処分を受けるであろう。私たちが育った大学という社会は、他の社会と異なった要素をこれまで多数保持してきたが、教員の任期制導入により、このような点が少しでも解決され、よりよい方向に進んでいくことを望んでいるのは私だけであろうか。

近年、歯科大学・歯学部へ入学する人たちの学力低下が指摘され、問題解決型の思考がとかく話題になっている。歯科学生の試験の総仕上げとして歯科医師国家試験がある

が、その難易度は過去に比べここ数年高くなり、合格率が低下傾向にある。このような状況を打破するために、学部教育を再考することで、問題解決型教育により思考過程の構築が達成されるようなカリキュラムが再編され、有為な人材を育てる努力がなされているところである。しかし、教育再編はその緒に就いたばかりで、どのような効果が現われるかは不明瞭であり、時間がかかることであろう。とは言え、大学の果たす第一の使命は多くの有能な人たちを社会に輩出することであり、喫緊の課題でもある。この点を十分に認識しつつ、可及的に教育がよい方向に向かうべく不断の努力が必要であろう。第二は、有能かつ有為な研究者を養成することであるが、歯科という特殊性を考えると臨床志向は当然なことではあるにしても、基礎歯科医学を目指す人はなかなかいないのが実情であり、きわめて残念なことである。また臨床研修医制度の導入により、専攻する者がますます減少し、まさに危機的状況を招いていることを大変憂慮している。この状態に歯止めをかけるために、私たちが今すぐに行うことができることは、基礎歯科医学への魅力の付与、具体的には臨床に直結する研究内容を実践することではないだろうか。このような視点、観点で私はこれまで研究を行ってきたが、その成果に関して社会に対するインパクトは必ずしも十分とは言えないようであった。近年、再生医学・再生医療が注目を浴びており、今後この分野の研究にこれまで以上に積極的に取り組むことが望まれる。

私たちが研究を始めた時代は外国に学ぶべきことはない、したがって自分の研究は自分で行い、しっかりとした日本語の論文を書くことを第一に心がけていた。しかし、今は昔とは大きく異なってきており、国際化、グローバル化が進み、世界の情報がリアルタイムに入手できるようになった。研究面においては、英語論文の執筆が必要不可欠となり、*impact factor*の高い雑誌への投稿が望まれる時代となった。このような社会的背景を考えると、これからの若い研究者は積極的に留学すること、あるいは国際学会に参加することが必要になってきている。海外での研究生生活でより多くの研究者と知り合い、国際学会という場で世界中の研究者たちがどのようなことを考え、どのような研究を行っているかを知ることができることは、研究をする上で極めて有意義である。

現在、こうして私が研究活動を継続できているのは、基礎歯科医学に理解を示してくれた多くの人たちがいたからである。その支えに応えるために、これからも基礎歯科医学を研鑽する若い人の役に立てるよう努力すると同時に、後進の人たちの指導に当たっていききたいと考えている。

(奥羽大学歯学部生体構造学講座)